

「モリイク」は、コープ未来の森づくり基金が、森と人、森づくりと人をつなぐ目的で発行している冊子です。

コープ<sup>あした</sup>未来の森づくり基金レポート

# モリイク

MORI - IKU

森に行こう。  
森で育とう。  
森を、育てよう。

vol.07  
Mar. 2014

## 編集後記

つるり。ざらざら。しっとり。さらり。堅い。少し弾力を感じる。温かい…。

木材には様々な感触があって、それぞれの特徴があって、その長所を生かして人は生活の中でたくさんの用途に木を使ってきました。日本中で斧の入っていない森など無いくらいに、人は木に頼り、森に関わって生活していたのです。

今でも周りを見渡すと、たくさんの木の製品が目に入ります。でも、その木の生きている姿や生きていた森や、そこに暮らす動物たちや梢に止まった鳥が見上げる星空や…。今、手許にある鉛筆一本が森を通じてつながっている、ひとつの宇宙のようなストーリー。そこに思いをはせる感性と心を、いつしか私たちは失ってしまったように思います。

何にでも渴望する現代社会に生きる私たちは、もう一度木に寄り添って、森のスピードで自分を見つめ直す必要があるのかもしれない。

ごつごつ。ばらばら。つるり。びらびら。ざらり…。森に生きている木の感触も様々です。そっと木の肌と自分の肌を合わせると、どんなに寒い日でも、なぜか優しい温かみを感じます。それはきっと、人と森が紡いできたつながりの温度に違いありません。

心を開いて身近な木の製品や、近所の木立にじっくり触れてみてください。きっとそこから私たちと森との豊かなつながりが始まるはずですよ。

あずもりfacebookページ

<https://www.facebook.com/coop.asumori>



携帯電話、スマートフォンからはこちらのQRコードからご覧いただけます。



モリイク vol.07  
2014年3月発行  
発行元/ コープ未来の森づくり基金

**FSC 100** この冊子は環境に配慮してベジタブルオイルインクおよび100%再生紙を使用して作成しています。



木を使う。  
森とつながる。  
森と人のつながりを取り戻して、  
その先に見える未来がある。

# モリイイク

はなれてしまった森と人の暮らし。  
木でものをつくる、使うということは  
それをもう一度つなげることもなのかもしれない。

## \* contents \*

- \*02 コラム 森づくりのトレンド  
未来のための市民による森づくり
- \*04 特集 森と木と人をつなげる  
木育ファミリー グリーンウッドワークへの誘い
- \*08 自然に身をまかせること  
Bjorn
- \*09 もっと樹のことを語ろう  
大きな木の小さな物語
- \*10 森に出かける前に知っておこう  
森のコワイ! あぶない? 野山の安全安心ノート
- \*12 森林再生コラム  
木からエネルギーをもらって、明日もがんばろう
- \*13 コープ未来の森づくり基金報告  
第4回北海道の森づくり交流会・Fの森ワークショップほか

## Starting Column 森づくりのトレンド

### あした 未来のための 市民による 森づくり

仕事でドイツに行って思うのは、本当にドイツ人は森が好きだということです。森の中には道がはりめぐらされ、一歩いてもそれは遊歩道ではなく、森林の管理や林業に使われる道なのですが、たくさんの老若男女がそぞろ歩きを楽しんでいます。眺めがよい頂上があるわけではなく、巨木があるというわけではなく、「普通」の森林の散策を楽しんでいるのです。なぜ森に来るの? と聞いてみても、森に来るのに何か特別な理由があるわけではなく、森を歩くのが楽しいからという答えで、逆に何でそんなことを聞くのかという顔をされてしまいます。

木材を使うということでも、

古くからある木造建築物を街並みとともに守っている地域がたくさんありますし、オフィスを訪ねても家具や内装で木材がふんだんに使われているところが目立ちます。また、ドイツは脱原発・自然エネルギーへの転換を積極的に進めていますが、木質バイオマスの利用も熱供給も活発です。一般住宅でのペレット等の利用も進んでいますし、地域の木材資源を活用したバイオマス産業があちこちで創出されており、未利用材の有効活用で林業経営に大きな貢献をしています。

日本は「木の文化」の国といわれていますが、ドイツとの差を見るにつけどうもそれは過去のことの様な気がします。森

林がいろいろと注目を集めていますが、登山はブームになっても森そのものを楽しむ人は多くありません。日本の木造住宅率は高いのですが、外から見ても内側から見ても木が表に出ているところはほとんどありません。壁天井はクロス、床は絨毯で覆われています(最近少し変わってきました)。日本では人と森や木との距離がずいぶん遠いような気がします。

森と人との距離を近づけるためには教室で森林の大事さを習うことも必要ですが、五感で森を感じ、体験することが重要だと思います。森林の研究者が書いている一般向けの解説書やエッセイなどを読んでい

ても、ほぼ必ず原体験としての小さい頃の森や木とのふれあいが出てきます。私自身も山好きの叔父に連れられて歩いた美しい森に何らかの形で関わりたいと思い、森林を専門に選びました。

もちろん大人になってから「開眼」して森に関わるようになる人もたくさんいますが、この人たちも多くの場合、森林ボランティアとして森で作業をしたり、木工で木の素晴らしさに触れたり、あるいは木や森と楽しく触れ合っている人たちに感化されるなど、体験がもたっています。

こうした体験する機会を提供し、森へのかかわりを深めてもらうために木育とい

うのはとても重要な考えだと思います。ここで私が「考え」と書いたのは、木育には教科書や決まったプログラムがあるわけではないからです。木育は「人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むこと」を基本として、人々が主体的に考えられるようにする手助けを、人・地域などの特性に応じて一番よいやり方を考えて進めようとしています。

木育ファミリーでつくっているパンフレットには、様々な森や木にかかわる体験をしている人々の写真とともに「あれも木育これも木育」という言葉が書かれています。これまで森や木に関わりのなかった人々が、一番関心を持ってそうなる

から、森や木の素晴らしさを感じ、関わりを深めていくための手助けを木育はできると思います。

木育は北海道から始まった、北海道が誇れる考えだと思います。北海道庁は「森林づくり基本計画」という森林づくりに取り組むための総合的な計画を策定していますが、その基本的な柱として「木育の理念を基本とした道民との協働による森林づくりの展開」を据えています。

木育の輪がさらに広がり、深まっていくことで、森林づくりをみんなで支えていけるようになればと思います。▲

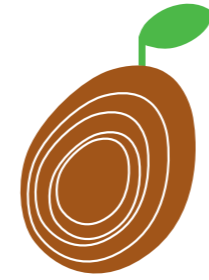


柿澤 宏昭  
(かきざわ ひろあき)

北海道大学  
森林政策研究室 教授

コープ未来の森づくり基金 運営委員長

1959年神奈川県横浜市生まれ。北海道大学大学院農学研究科修士課程修了。現在、北海道大学農学部森林政策研究室教授。持続的な森林管理を多様な人々の協働で支えるしくみづくりをテーマに研究を行っている。また、欧米、ロシアなどの森林管理政策にも詳しい。主な著作に『エコシステムマネジメント』(築地書館)。2008年より「コープ未来の森づくり基金」運営委員長を務める。



森と木と人、その関係を主体的に考える「人」をつくる。木育とは、そういうこと。

## 木育ファミリー

### 「つながり」を意識する人をつくる、 木育の思い

私たちの身の回りにはたくさんの木製品があふれています。家や家具はもちろん、紙やゼロハンテープなどの日用品。でも、木製品から材料である生きている木やその周りの森の姿を思い浮かべるのは難しいかもしれません。

木製品の木(ちやいろの木)と森に生きる木(みどりの木)はもともとはひとつの木。しかし、利便性や経済優先の現代社会ではその見方や接し方に偏りが生まれ、自然や生活の環境に様々な問題を抱えるようになってしまいました。

人と人、人と自然、モノと自然。そのつながりが希薄になってしまった昨今、身近な木や自然を通してもう一度日本人が古来から育んできた木と森と人の関係を取り戻さなければいけない。私たち人間も自然の一部であり、多くの生命と共存して生きてい

るということを認識しなければいけない。そのような目的で生まれたのが「木育」という理念だったので。

### 木育の活動は幅広く、 そして世代を超えて永く

すべての人々が「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組み。それは子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育む。

これが、2004年に北海道と道民による「木育プロジェクトチーム」によって作られた木育の基本理念です。木育という言葉と考え方は北海道で生まれたもの。以来、日本中でさまざまな人たちによってさまざまな木育活動が行われるようになりました。そこには、「あれも木育、これも木育」という言葉に表されるように、木育のイメージを型にはめることなく、木と関わる様々な活動が、世代を超えて長く続けられてほしいという

願いが息づいています。

木育の理念が生まれた翌年の2005年、そんな考え方に沿って、有志が集まって独自に活動を始めたのが「木育ファミリー」です。木育ファミリーは、木育を広める人材「木育マイスター」の育成事業や木の情報をシェアし、交流する「木育カフェ」・「木育ミーティング」などのイベントのほか、むかわ町種別の旧和泉小学校に「むかわ木育の学校」という木育の場づくりを進めるなど、さまざまな活動を進めてきました。

その木育ファミリーがここ数年に着目して活動に取り入れているのが「グリーンウッドワーク」。その魅力はどんなところにあるのでしょうか。

**木育ファミリー information**  
 〒062-0053  
 札幌市豊平区月寒東3条19丁目20-11  
 ☎ 011-855-5510 (KEM工房内)  
 http://www.mokuiku.net



みんなが“ハマる”木育

# GREEN WOOD WORK

## グリーンウッドワークへの誘い



木育ファミリーの挑戦。それは、グリーンウッドワークで人と木と森を結ぶこと。

グリーンウッドワーク協会※を中心にその活動が広がっています。

「木が活着ているのが分かるんです。緑色の樹皮と植物のにおい、みずみずしい材。それに、ちょっと堅めのにんじんみたいに、刃物を当てても簡単にさくさく削れて、それだけで楽しい！」と、煙山さんは、GWWの魅力語り。

伐り出されたばかりの生木は水分をたっぷり含んで柔らかく、誰でも簡単に加工ができますし、生の木を加工することで、五感を使って生き物としての木を感じることができる。そして、その場で作って使うことができる。それがGWWの大きな魅力なのだそう。

「木工といえば、乾燥した堅い木を電動の工具で加工するイメージしかなかった。でも、誰でもすぐできるのは敷居が低いし、木の曲がりや癖を見極めながらものづくりをする。考えてみれば、これってイギリスだけでなく日本の木地師やアイヌの人たちがずっと続けてきたプリミティブなものづくりですね」。そして活動に参加する人たちからは自然に会話とつながりが生まれます。「木

を話題にして初対面の人たちが話し、作品をお互いにほめ合って、作ったものに誇りが持てる。作ってよかったと思える。それってすごく大切」と、GWWが人と木と森、そして人と人をつなぐものであり、木育の目指すものをよく表しているのだと言います。

北海道のグリーンウッドワーク、勝手に広がっています。

木育ファミリーのGWWが始まってから今年で4年目。最初は講師を岐阜から招いて行っていた講習会も、今ではむかわ町穂別に「むかわ木育の学校」という拠点を設けて自由にGWWができるようになり、また、器具・工具の貸し出しも行うようになりました。こうした活動で、帯広やニセコ、道南など、独自にGWWを行う団体や個人が増えていて、「今度は、GWWに使う削り馬を自分たちで作るワークショップをやりたいって言われていて、たくさんの人がこの活動に興味を示してくれています」と、GWWの活動が勝手に広がりを見せているとも言います。

「こういう、森と木と人がつながっていることが実感できる活動って、なかなかないでしょ。でも、GWWはぴったりなんです」。これからもGWWの活動はもちろん、みんながやってみると楽しいと思える活動を、木育ファミリーは続けていくのだと話してくれました。

グリーンウッドワークは森と人にグリーンな関係を作れるかも。

森づくりは植樹から始まり、育樹や枝打ちなど、様々な行程があります。そこから伐り出された木の枝や間伐材はほとんど使い道がなかったのが現状かもしれません。しかし、例えば、森で伐り出した材をGWWでその場で生活の道具にできるなら、森と木と人、その関係をもっとぐっと深く、立体的にすることができるかもしれません。そして、昔はみんなそうして生活を形作っていたのではないかと思います。

こうしたプリミティブな森と人の関係が、これからの森づくりの大切な要素になっていくのでは。GWWは、そんな未来を感じさせてくれるのです。🌲

※ NPO法人グリーンウッドワーク協会 <http://www.greenwoodwork.jp>

森と木と人のつながりを実感する、そんな活動って、なかなか無いかもしれない。

「北海道の自然といったら森。森と海はつながっているし、そこに人の暮らしもつながっている。食育のように、それをしっかりと考えられるベースをきちんともう一度認識して、このつながりを主体的に考えられる心を育てるっていうのが、とても大切なこと」。

そうすることで木や森と私たちがどうつきあっていくのかを自分で考える人を育てることが木育なのだと言います、木育

ファミリー代表の煙山さん。2004年に木育という言葉と考え方が北海道で誕生してから、より自由な発想で木育を展開しようと結成した木育ファミリーは、基本理念をバックグラウンドにした大きな流れの中で、様々な形で人と木と森が関わる活動を続けています。

しかし、森と人、木と人のつながりというものを実感できる活動というのは案外難しいもの。木のことをテーマにすれば森が離れ、森をテーマにすれば木が近づかない。そんな中で、名古屋のセミナーでグリーンウッドワーク(以後、GWW)に初めて触れた煙山さん、一気に

その魅力にはまってしまったと言います。

グリーンな木とエネルギーでつくるグリーンウッドワーク。

そもそも、GWWとはイギリスで発祥したといわれる生木(グリーンウッド)を材料に行われる木工のこと。削り馬という材料の固定具と足踏みろくろ、そして簡単な刃物で家具や食器など必要なものを作ってきた技術です。これに現代的な要素として、電力などのエネルギーを使わず、動力を全て人の力でまかなう「グリーン」な木工という意味を込めてGWWとされ、日本では岐阜のNPO法人



自宅を建てた時に植えたブナが大きくなったので剪定。切った枝からグリーンウッドワークで椅子を作りました。こんな風に、思い出を込めたものづくりができて、それをずっと使えるのも魅力です。

話してくれたひと  
木育ファミリー代表  
KEM工房  
煙山 泰子さん

木から簡単な櫛枝を作って果物を食べてみるとか、そんなことも立派なGWW。むかわ町の「むかわ木育の学校」には削り馬や足踏みろくろが並んで、北海道のGWW拠点になった。そこから生まれるのは小さな花のオブジェやクリスマスツリーから、スプーンや椅子などの生活道具まで。森と人がつながる活動。それがGWW。

植える→育てる→使うことで保たれる森林。  
木を使うことも、森を守ることに繋がっている。

木づかい  
Column

心の中にある森。  
手に取るたびに  
その森のことを思い出す、  
そんな木のものづくり。

# Björn

Craft & Design

Bjorn(ビヨルン)とは、スウェーデン語で「クマ」のこと。その名の通り、北海道のヒグマにひとしきり思い入れのあるクラフトマンが知床に工房を開いたのは2011年のこと。

中西将尚なかにしまさなおさんは香川県の出身。世界各地を旅行したり、東南アジアでのボランティア活動をしたりと、遍歴を経て知床にやってきました。そして知床で10年間携わったのは、ヒグマの保護管理。たくさんの観光客がやってくる世界遺産、知床は世界有数のヒグマの生息密度です。ヒグマと人の距離が近いと、事故が起これないように調査や対策を行う、中西さんはいわばヒグマのプロフェッショナル。やってくる多くの人に安全に知床の魅力を感じてほしいと地道に活動してきました。

しかし、自然の素材を使ったものづくりの仕事をしたことから、ヒグマの保護管理の人材が育ったのを機に旭川に木工の修行の3年間を経て

再び知床に戻り、斜里岳のすそ野の廃校で工房を開設したのでした。

中西さんが手がけるのは、主に木の小物。小物は手で持って触れること。そして近い距離で楽しめることが魅力なのだとか。知床の森を歩いた観光客がそれを持ち帰れるというところも重要。

材料は北海道産の木材を使っています。それは、手に取った木のおみやげが、知床の森歩きで見た木と同じものだということを思い出すきっかけにしてほしいからだと言います。長く手許に置いて、知床を思い出せるものを作りたいと、道産の木材にこだわったおみやげになる小物づくりを進めています。

そこまで知床に思い入れを持っている理由には、世界中を見てきた中西さんならではの視点がありました。それは、道東の自然のすばらしさ。これだけの人口密度の国土でクマと折り合いをつけていられる北海道とい

う土地、そして2時間移動すれば全く違う環境に移ろう多様な自然。

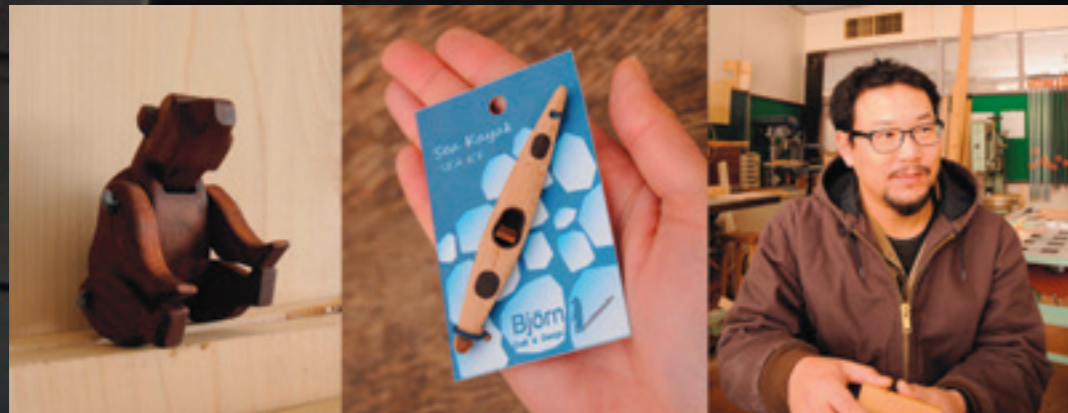
そんな道東の自然、特に知床の自然は「遠くにおいて思う森」なのだと言います。つまり、日本人にとって、知床は「あってほしい存在」。そしてそれを心の中に持っていてほしい。「森づくりはそこから始まるでしょ。身近な自然での教育も大切だけど、行ってみて理屈抜きに“すごい”と思う森に出会って世界観を変えることも大切。知床はそんな森」と、知床の森の魅力を話してくれました。

工房の名前「ビヨルン(クマ)」は中西さんの木工の先生が付けてくれたもの。その中には、中西さんがずっと携わってきた知床のヒグマたちや、そこから広がったつながり、そして知床の森への思いがあります。

その思いが知床を訪れる多くの人に伝わってほしいと、中西さんは一つ一つの作品を大切に作り続けています。✦

ビヨルン  
中西 将尚さん

香川県出身。大学卒業後にフィリピンやインドネシアでのボランティア活動を経て北海道へ。知床国立公園のヒグマの保護管理を10年続け、斜里町の旧三井小学校で工房を開設。  
<http://bjorn.exblog.jp>



Column  
植樹の図鑑 知っておこう。私たちが植える木にも物語がある。

# 大きな木の 小さな物語

## ② シナノキ

「…昔なじみとしなのき枝はどこで会うてもしなしな」と佐渡の民謡にあるような…。シナノキの語源、よくわかっていないのですが、この民謡もそのひとつといわれています。この「しなしな」と説、ほんわかして私は好きです。

前置きが長くなりました。シナノキはシナノキ科シナノキ属の高木で20mほどの高さになります。森の中でも斜面の中腹から下の方、やや湿って肥沃なところに生えています。

札幌付近では7月中旬に花を咲かせます。満開の時には木がクリーム色に見えることさえあります。この花からは良質な蜂蜜が採れます。シナミツですね。

秋にはプロペラのような羽根を付けた実がなります。クルクル回りながら飛んでいく様子、見たことありませんか？ぼっとんと自分の根元に落ちないで、できるだけ遠くで育てて欲しいという工夫の一つなのでしょう。

翌春、5月の末ころに発芽します。硬く重そうな殻を持ち上げながら根を伸ばし、そして子葉が開きます。初めて見たとき、これがシナノキになるの!?と驚いたことを今でも覚えています。

アイヌの人たちは、シナノキの内皮の繊維で縄をつくったり布を織ったりしました。東北地方でも同じように使われ、山形県と新潟県の一部では、シナノキの繊維で織られた布が「しな織」として経済産業省の伝統工芸品に指定されています。

シナノキの材は全体に白く、さらに柔らかくて加工しやすいために昔は時計枠や洋風建築の指物彫刻に使われました。版画用の板もそうです。そして刃を傷めず彫りやすいので「木彫り熊」にも。今は、シナベニヤとしてちょっと高級な合板材としても使われています。

ひとつ忘れていました。花開くと甘い香りを放ちます。夏の宵闇、シナノキの並木を歩くと香りが鼻腔いっぱい広がります。夕涼み、この木の下をそぞろ歩きするの、いいですよ。街路樹、近くで探してみても…。✦



本葉 子葉

text/images 孫田 敏

'54年山形県長井市生まれ。'77年北大農学部林学科卒業。林業、その後造園・緑化工事に従事。'90年から建設コンサルタント。緑化計画が専門。技術士(建設部門;建設環境)。'00年から北の里山の会代表。著書:アトリウムと植生(積雪寒冷地型アトリウムの計画と設計;絵内正道編著)、水辺林復元計画の基本的考え方と計画の進め方(水辺管理—その理論・技術と実践—;砂防学会編)、森林管理と市民参加(北のランドスケープ 保全と創造;浅川昭一郎編著) WEBサイト「Scan Botanica」<http://scanbotanica00.sblo.jp>



参考 上原敬二, 1961, 樹木大図説2, 1203pp, 有明書房  
文献 朝日新聞社編, 1968, 北方植物園, 330pp, 朝日新聞社

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂, 2011, カラー版日本有用樹木誌, 238pp, 海青社  
※画像材料提供: 雪印種苗株式会社(芽生え)

# 森のコワイ! あぶない? 野山の安全安心ノート

その1  
スズメバチ・マダニ



楽しい野遊び、キャンプにハイキング。  
自然の中は楽しいね。  
でも安全のために町の中とは違う注意が必要です。  
人にはあぶない、虫や動物、植物、そして感染症。  
そんなこと聞いたらコワイかな?  
けれど、あぶない理由を知り、対策を立てればだいじょうぶ!  
これは「コワイ」を「楽しい」に変えるための危機管理ノートです。

## ブンブンブン 黄色と黒は危険信号!! スズメバチに出あったら?



**1** 北海道で最も命にかかわる危険動物といえは...実はスズメバチなんです。さて、こわいスズメバチがブンブンと近づいてきたらどうしますか? 手で払うのも、走って逃げるのも「X」。  
スズメバチは巣の周りを偵察隊が警戒し、人間や動物が近づくと調べにくるのです。「こいつはワタシたちにとってキケンなやつ? ブンブン」。これを追い払ったりすると「敵だ!」と思われま。仲間を匂いで呼び集められ、集団攻撃を受けることにもなります。

スズメバチは刺されると痛いに加え、2度目になると、ショック症状を起こす人がいます。呼吸が乱れ、意識がもうろうとなりますので、できるだけ早く病院に運びましょう。事前に皮膚科で診察を受けると、個人用の自己注射器具を処方してくれます。

**2** どうしましょう? 相手が1匹だけなら、帽子を深くかぶり、手で顔をかくしてジッとがまん! 何もしなければやがて離れていきます。その後、そっと離れます。  
※野山に入る前に「ジッとする」練習をしておきましょう。

**3** もしも知らずに巣を壊したり、偵察隊を払いのけたら、たくさんのスズメバチが襲ってきたら...。これは逃げ出すしかありません。なるべく背を低くして、おぼろげに離れましょう。



## 知らずにくっつく やっかいもの マダニのチェックを忘れずに!



**3** もし食いつかれていたら皮膚科へ行きましょう。

マダニの口は皮膚下で横に広がっています。自分で取る場合、左右にゆすりながらゆっくり抜きます。取れたダニは必ず頭や体の状態を観察して、もし頭部が皮膚に残っていれば化膿するので病院へ。また、うまく取れても熱やだるさを感じるようなら、感染症の恐れがあるので診察を受けましょう。

**1** 最近増えているのはダニ(マダニ)です。ダニは哺乳類や温血動物の血を吸って増えます。ふだん木の枝先や草の葉にとまっていて、動物や人間が通ると毛や服にしがみつきます。皮膚に食いつかれたら血を吸われるだけでなく、臭いが悪くなる場合もあります。

**2** とはいえ、皮膚に食いつくまでには少し時間があります。外で遊んだら休けない時間や帰宅後、ダニチェックをしましょう。ズボンのウエストや首筋、腕時計のバンド下などもチェック! 小さい子は、着替えてしっかり点検してもらってね。



黒より白

スズメバチもダニも黒っぽい服装に寄ってきます。敵や寄生する動物の体毛の色が濃いからでしょうか。顔面だとハチは黒い眼玉を攻撃することも。それを逆手にとって、白っぽい服装が効果的です。

## 長そで 長ズボンで のびのび遊ぼう

肌を出さない服ならひっかけ傷もできにくい。下着は綿より乾きの早い化繊素材がおすすめです。しっかり身を守ると、気持ちよく遊べますよ。

気をつけてしっかり準備して森に行けば、私みたいにならずに楽しく遊べるよ!



↑のところにマダニがついています。

## 準備があれば 森がもっと好きになる

~森で安全に遊ぶための服装チェック!~



## 帽子と手ぬぐいでガード

頭を守るため帽子は必ず身につけて。帽子は虫よけだけではなく、熱射病や目の負担も防いでくれます。もちろん色は白っぽい色や明るい色。ダニのいそうな場所では、白い手ぬぐいを首筋に巻いて。遊びの内容によっては手袋も忘れずに。



## 食べる前に...

食べる前は寄生虫の予防に流水でしっかり手を洗いましょう。水がなければ、除菌ティッシュを使って。

里に近いボクの森でも、最近は毎年のようにクマと出くわします。ほんだかヒトを恐れなくなってきたみたい。マダニはここ10年、おどく増えました。吸血の相手になるシカが増えたからかな。自然はいろんなことがつながっていて、気づかぬうちに変わっています。  
アブナイとコワイは少し違うかもしれない。コワイと思う気持ちは大事だけれど、おぼろげに恐れず、何がアブナイのか、分かることもだいじ。動物たちも、人を傷つけたくて襲ってはきません。彼らも必死なのです。相手を知らず、森は楽しく、安全にもなります。



お話を聞いた人 山本 牧 さん  
写真提供・取材協力

1955年、福井県生まれ。北大ヒグマ研究グループに入り、大学院まで7年間、北海道の森を歩く。北海道新聞記者として道内各地を転勤。2010年、早期退職し、森ガイド兼木こり。NPO法人もりねっと北海道理事。旭川市在住。

**新岡薫/エトブン社**  
北海道のイキモノをテーマに絵と文を描いているイラストレーター。トカゲと鳥とエゾシカが気になる。猫とキツネを見たら追いかける。クモはちょっとコワイ。好きなことは森と動物園と水族館の散歩。札幌出身。  
ブログ <http://etobunshaineyezo.blogspot.com/>

**宮本尚/きたネット**  
森好き、ヘンなイキモノ好きは、オホーツク海を眺めて育った子どもの頃から。最近キノコのトリコです。北海道の森の歌を作りたいと思いつつ、なかなか時間がとれないのが悩みのタネ。今年こそ!  
森づくりナビ北海道 <http://kitanet-mori.com>

# 木からエネルギーをもらって、 明日もがんばろう

道東の僻地育ちの私には、森は「行く」ところではなく「在る」もの、遊び場所は家のそばのシラカバ林、小川のそばの柳の河畔林、裏山のトドマツやアカエゾマツ林、海辺のカシワ林など、まさに原風景・原体験の場でした。

子どもだった私がそこで何をしていたかという、例えば、バランスの良いV字の枝を選んでパチンコづくり。きれいに湾曲した枝は弓矢に。オトコノコなら、その武器でイキモノを追い回すのかもしれませんが、私は心優しい動物好きのオンナノコだったので、木の幹やブドウの実を的にして遊んでいました。枯れ枝と笹や落の葉で秘密基地を作ったり、登りやすい木の上に板を渡してデッキをつくり、その上で本を読んだりオヤツを食べたりしていました。私の生活は「木育」というより「森育」だったと思います。

木が身近にある生活、というキーワードで思い出すのが、記憶もおぼろげなあの頃。当時、私が住んでいたのは、小さな教員住宅。そこには同じような住宅が集まって建っていました。秋になると、住宅に挟まれた空き地に、どんと木材が積まれ、まんなかに電動の丸ノコが設置されます。親たちは、自分の家の分の木をその丸鋸でシャッと切って薪の大きさに揃え、「薪小屋」に運び入れます。この薪は、冬の間の石炭ストーブの焚き付けやお風呂に使うのです。薪の一部を焚き付け用に細く割るのは子どももやる仕事でした。小学生になるかならないか

のオンナノコが、家の前の石の上に薪を置いて、ナタを割れ目にさしてコンコンと、焚き付けを作っている風景。最近、薪を使っているレストランの裏庭で、同じような子どもの仕事ぶりを見て、懐かしくて、思わずにっこりしてしまいました。

小学校の頃には自宅のストーブは石油ファンヒーターに変わり、そんな暮らしはきっぱり終わりを告げました。ねじった新聞紙を焚き付けの下に押し込み火をつける。その日によってなかなか上手くいかない時があります。ストーブに火をつけるのは生活の中のちょっとした「技術訓練」、上手になると少し大人になったような気がする、そんな体験も遠くなくなっていました。

それがそれが、最近になって、火を焚き付ける「技術」をまた使い始めています。それは、自宅でペレットストーブを使っているからです。自動点火ではないので、毎日、新聞紙や雑誌の1ページをねじって、その上に使用済みの割り箸を短く折ってのせ、マッチを擦って火をつけます。燃える割り箸の上にポトポトとペレットが落ちて火が移ると成功、心の中でエッヘン。

「木育」という言葉で思い出したのは、ピアノ。フタをひらいて何千という木から作られた部品が動くのを眺めるのが好きでした。フェルトで包まれたキレイな木のハンマーが、整然と張られた弦を叩いていくのを飽きずに眺めていました。学校の音楽室で、いろんな楽器を鳴らし

てみるのも好きでした。身近な楽器のほとんどはきれいな木で、きれいな手技で作られています。ピアノ、ギター、カスタネット、タンバリンの輪、木琴、ドラムの胴、木の種類によって音が違います。最近、木育をテーマにしたイベントで、カホンという箱形の楽器づくりが人気を集めています。コープ未来の森づくり基金でも、食べるたいせつフェスティバルなどで、北海道の木のカスタネットづくりのコーナーをやっていて、これが大人気です。木の肌ざわりとあたたかい音が身近にある生活はステキだなあと、みんな感じているのでしょう。

そうそう、北海道には、実は楽器に適した、世界的にも高い評価を得ているすばらしい響きの木がたくさんあるのです。次回はそんな話をさせていただこうかな。

今から10年ほど前、ある有名な占い師に手相を見てもらったことがあります。その人に「あなたは木と縁があるから、弱ったり、困ったりしたときは“樹に力をもらいなさい”」と言われました。占いは信じる方ではないけれど、これはともしっくり、やっぱりねと思いました。私は心や体のエネルギーが足りないと感じたときは森に行きます。札幌だと藻岩山、旭山、中島公園や大通公園のハルニレの下、北大植物園。しばし森林浴を楽しみ、人の目をちょっとだけ気にしながら樹の幹にハグすると、なんだかほっとして、明日もがんばれるような気がしてくるのです。✦



みやもと なお  
宮本 尚

認定NPO法人北海道市民環境ネットワーク「きたネット」常務理事

オホーツク出身、東京での生活を経て、札幌市在住。コピーライター、心身障害児(者)の介護・マネージメントなどを経て、現在はきたネット理事のほか、「北海道エネルギーチェンジ100プロジェクト」の事務局長、シンガー・ソング・ライター、ペレットストーブの前でいつもヌクヌクしていた20歳7か月の猫が、昨年冬について逝ってしまい、この冬は寂しい気持ちで過ごしました。

Report

## 第4回 北海道の 森づくり交流会

今回は「木を使うこと」がテーマ。  
植えるだけではない、  
使うことで森も人も元気になる。  
そんな森づくりについて考えます。



特別講演

### 木を活かす、という森づくり

第4回を迎えた北海道の森づくり交流会。今回のテーマは「木を活かす」こと。森を育てるだけでなく、木を使うことも森づくり。まずは、岡山県で木を活かすことで地域再生に取り組む牧さんの講演です。

### 小さなチャレンジと 豊かなつながりが未来をつくる

岡山県の西粟倉村は過疎にあえぐ小さな村。しかし、周囲の市町村との合併の道を選ばず、自立の道を歩むことに。地域を担う人材育成と移住の促進によって森林・木材の関連で10のベンチャーを生み出し、現在は70名を雇用し、5億円程の産業規模になりました。

それを牽引してきた牧さんは「大量生産・大量消費の仕組みに巻き込むには限界がある」と、あえて逆を向いて小さなローカルベンチャーをいくつも立ち上げ、さらに雇用を生む力のある人材育成を目指して活動しています。



### 「万能えくぼ」、お楽しみに！ みんなで木の製品を考えるワークショップ

恒例となった交流会のワークショップは、「もらってうれしい木の製品を考えよう」というテーマでグループに分かれて木製品のプランづくりに挑戦。「森づくり」というキーワードだけで集まった見知らぬメンバーが、それぞれの知恵を持ち寄って考える、交流を深める時間でもあります。そんな皆さんが考え出した木の製品はバリエーションさまざま。

樹種の違いに着目しただるま落としは、叩いた音の違いを楽しむ逸品。木のカップのペンダントは、北欧サーメ人のシラカバで作るカップ、ククサからヒントを得たもの。木の枕で快眠！なんていう独創的なアイデアまで。

自由な発想の中から大賞に選ばれたのは、その名も「万能えくぼ」。これは、持つ人に限りない安堵と癒しを与えるという木の製品ですが、どんなものなのかは、まだ秘密。現在このワークショップの審査も務めた「チエモク株式会社」で現物を制作中。なんと、

スの内装も手がけています。西粟倉の間伐材を使って森を元気にする、そういうオフィスづくりを一緒にやりましょう、というストーリーを描くんです。森と商品を通して豊かなつながりを地域と都市部に作ることで、この先50年の地域の経済を支えるのだと話してくれました。

「50年前に樹を植えた人たちの思いを引き継ぎながら、50年後に今の若者達が孫を連れて美しい森林でホテルを見る。そんな夢を描いています。大成功よりも小さなチャレンジを積み重ねる。そうやって森の持っている価値を引き出すことは、まだまだできると思います。そしてそのチャレンジが北海道にも広がってほしいと、森を活かすことで人と地域が育つ豊かな可能性について、明るい未来を示してくれました。



牧 大介氏  
株式会社西粟倉・森の学校 代表取締役、株式会社トビムシ 取締役、小村力研究所 所長。大手コンサルティングを経て農山漁村の新規事業プロデュースを手がけ、岡山県西粟倉村を含め、各地で地域資源を活かすローカルベンチャーの育成に注力している。京都府出身。

次号のモリイクの読者プレゼントになります！ 詳細は次号でご紹介しますのでお楽しみに。

「木でものをつくる」というだけで、こんなにわくわくするアイデアが生まれてくる。そんな森づくりの一面も、これから皆さんで楽しんでいきたいですね。

たくさんの独創的なアイデアが生まれて面白い！十分に話し合う時間が無いのがほんとにもったいなくなかったです！



チエモク株式会社  
三島 千枝さん

event

2013年度の森づくりワークショップ

# Fの森 ワークショップ

写真提供 川口弘高(きたネット)

## 未来の森の姿について、 自分たちで考え、行動しています!

2012年度から始まった市民によるワークショップ形式の森づくりプロジェクト。今年度の後半のワークショップシリーズが行われました。

夏には、苫小牧の先進的な森づくり事例を視察したり、森の危険な生き物について学んだりしました。また、実際にむかわの森の手入れをしながら、森の恵みをどう利用していくかをみんなで考えることも。そしてベレットグリップヒーター「きりんさん」を使ったお茶タイムで、ちょっと豊かな森の時間を楽しんでみることも忘れませんでした。

秋に入ってからはいよいよ次の植樹計画を考えます。新しいメンバーとも交流を深めながら、Fの森を歩いてその環境を見たり、樹種を確認したりしました。そして見て楽しい、歩いてうれしい森を頭の中にふくらませながら、湿った環境・乾いた環境に合う樹種は何がいいのか、という専門的な見地も

取り入れた、ちょっと高度な森づくり計画を練りました。

さて、そんな一連のワークショップを通じての植樹計画はどのようなのか、下の図にまとめてみました。

植栽する樹種は全部で25種。最大の特徴は、今までのように樹種ごとの植樹ではなく、エリアを決めてそこにランダムに植えるということ。単一ではなく、様々な種類を織り交ぜて、より天然に近い森づくりを試みます。

そんな森づくりのプロセス、参加者の皆さんは、「森を読みとれるようになった」「これからも参加して森の変化を見ていきたい」「植樹に来る人に計画の意図を伝えていきたい」と、より深い市民による森づくりに意識が向いているようでした。皆さんも、より深く、面白くなっていくFの森の森づくりにぜひご参加ください。✂

## 2013年度 森づくり ワークショップ報告

### 7/27 苫東環境 commons の森視察と むかわの森のお手入れ

苫小牧の先進的な森のお手入れを視察。フューチャー間伐や馬搬などを学びました。むかわの森は春とは違う表情。森のお手入れがてら、マイステッキづくりもしました。



### 10/5 Fの森の変化を知る・植栽第2ラウンド 2014植樹エリアマップ作成

Fの森をみんなで歩き、木の種類や植樹地を観察しました。その後は2014年の植樹地のイメージづくり。トレイルを決めたり植栽地をどこにするかを話し合いました。



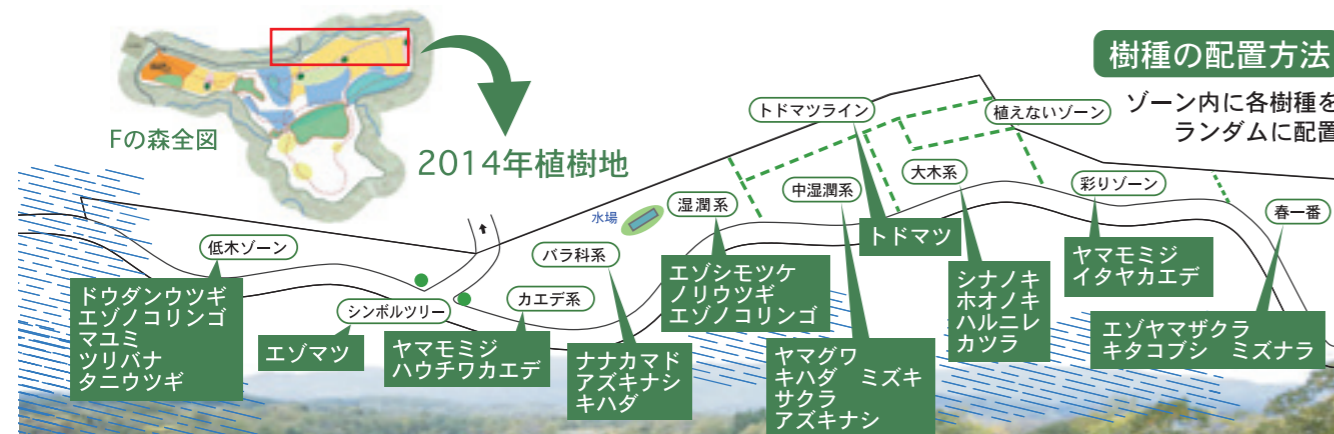
### 11/16 2014年度の植樹プランを作成

2014年の植樹地は湿地から丘まで、環境が多様。それに合わせた植樹木の選定や、見て楽しい森を育てるためのゾーン分けをしました。シンボルツリーも決めましたよ。



### 樹種の配置方法

ゾーン内に各樹種をランダムに配置



Sponsors

## 2013年度 コープ未来の森づくり基金 ご協賛を頂いた企業・団体様

コープ未来の森づくり基金は、下記の企業・団体の皆様をはじめとする多くの方々を支えられて運営しています。

|   |   |  |   |
|---|---|--|---|
| (株)J-オイルミルズ北海道支店<br>(株)アイチフーズ<br>(株)アクリフーズ<br>(株)伊藤園<br>(株)ウテナ<br>(株)小川生菓<br>(株)小原<br>(株)オリオンペーカリー<br>(株)菊田食品<br>(株)キョウシヨク<br>(株)きらら<br>(株)サクラバ<br>(株)白子<br>(株)スギヨ<br>(株)創味食品<br>(株)ソラチ<br>(株)ダイホク<br>(株)土倉<br>(株)テンヨ武田<br>(株)ニチレイフーズ<br>(株)ニチロサンフーズ<br>(株)パールエース<br>(株)はくばく<br>(株)ビックルスコーポレーション<br>(株)ブルボン<br>(株)ホクリヨウ<br>(株)ホクカン<br>(株)堀川<br>(株)マルナカ<br>(株)マルハニチロ食品<br>(株)マルハニチロ北日本<br>(株)みずがコーポレーション<br>(株)ミツカン<br>(株)ヤクルト本社<br>(株)ロッチェアイス北海道支店<br>(株)宇治園<br>(株)永谷園<br>(株)丸三北栄商会<br>(株)紀文食品<br>(株)菊水<br>(株)極洋<br>(株)古清商店<br>(株)湖池屋<br>(株)江戸屋<br>(株)佐々木製菓<br>(株)札幌パリ<br>(株)七尾製菓<br>(株)新進<br>(株)正栄デリシイ<br>(株)大井川茶園 | (株)程野商店<br>(株)東京ドーナツ<br>(株)桃屋<br>(株)奈良コープ産業<br>(株)入福福田商店<br>(株)不二家<br>(株)北海道サンジェルマン<br>(株)北海道日水<br>(株)明治<br>(株)鳴門のいも屋金時工房<br>UCC上島珈琲(株)<br>UHA味覚糖(株)<br>赤穂化成(株)<br>アサヒ飲料(株)<br>イトアンド(株)<br>イトウ製菓(株)<br>エスコック(株)<br>エステー(株)<br>エスピー食品(株)<br>エバラ食品工業(株)<br>エンバイアー<br>王子ネピア(株)<br>オタフクソース(株)<br>オハヨー乳業(株)<br>カゴメ(株)<br>かどや製油(株)<br>カネカ食品(株)<br>かねざ(株)<br>カバヤ食品(株)<br>菓房なのはな東京工場(株)カガフーズ<br>カメヤマ(株)<br>カルビー(株)<br>カルビス(株)<br>カンロ(株)<br>キーコーヒー(株)<br>キッコーマン食品(株)<br>キュービー(株)<br>キング醸造(株)<br>クラシエフーズ販売(株)<br>ケンミン食品(株)<br>コープさっぽろPB<br>コンフェックス(株)<br>さくら食品(株)(製造者)<br>三栄食品(株)<br>サンスター(株)<br>サントリーフーズ(株)<br>サンモト(株)<br>サンヨー食品(株)<br>ジェイティ飲料(株)<br>シーズイシハラ株式会社 | ジャパンフリトレ(株)<br>シロクマ北海道(株)れもんペーカリー<br>新得物産(株)<br>タカノフーズ(株)<br>テーブルマーク(株)<br>ニコニコのり(株)<br>日本水産(株)<br>日本製粉(株)<br>日本フレッシュフーズ(株)<br>ネスレ日本(株)<br>ノーベル製菓(株)<br>ハイツ日本(株)<br>ハウスウェルネスフーズ(株)<br>ハウス食品(株)<br>はごろもフーズ(株)<br>はごろもフーズ(株)<br>ハナマルキ(株)<br>林一(株)<br>ハラダ製茶(株)<br>フジコ(株)<br>フタバ食品(株)<br>ブルドックソース(株)<br>ベル食品(株)<br>ホクト(株)<br>ホクレン農業協同組合連合会<br>北海道塩業(株)<br>ポッカサッポロフード&ビバレッジ(株)<br>マルカワ食品(株)<br>マルコム(株)<br>マルトモ(株)<br>盛田(株)<br>やまう(株)<br>ヤマキ(株)<br>ヤマサ醤油(株)<br>ヤマダイ(株)<br>ヤマナカフーズ(株)<br>ウキ食品(株)<br>ユニチャーム(株)<br>エコーパル(株)カスタマーマーケティング(株)<br>ロッテ商事(株)<br>旭化成ホームプロダクツ(株)<br>井村屋(株)<br>一正蒲鉾(株)<br>越後製菓(株)<br>加藤産業(株)<br>楽陽食品(株)<br>丸永製菓(株)<br>丸大食品(株)<br>丸美屋食品工業(株)<br>岩塚製菓(株) | 岩田醸造(株)<br>柳引農村工業農業協同組合連合会<br>江崎グリコ(株)<br>国分(株)北海道支社<br>佐藤食品工業(株)北海道営業所<br>三幸製菓(株)<br>三桃食品(株)<br>三菱食品(株)<br>山下食品(株)<br>森永乳業(株)<br>森永製菓(株)<br>森永乳業(株)<br>赤城乳業(株)<br>雪印メグミルク(株)<br>大王製紙(株)<br>大塚製菓(株)<br>大塚食品(株)<br>大日本除虫菊(株)<br>竹山食品工業(株)<br>天野実業(株)<br>東北みやげ煎餅(株)<br>東洋水産(株)<br>内堀醸造(株)<br>日清オイログループ(株)<br>日清シスコ(株)北海道支店<br>日清食品(株)<br>日清フーズ(株)<br>日清食品冷凍(株)<br>日本ハム北海道販売(株)<br>日本水産(株)<br>日本生活協同組合連合会<br>日本製紙クレシア(株)<br>日本蜂蜜(株)札幌営業所<br>日糧製パン(株)<br>伏見蒲鉾(株)<br>福山醸造(株)<br>片岡物産(株)<br>北海道キリンビバレッジ(株)<br>北海道コカ-Cola(株)<br>北海道漁業協同組合連合会<br>北海道日高乳業(株)<br>北海道味の素(株)<br>北日本フード(株)<br>味の素ゼネラルフーズ(株)<br>理研ピタミン(株)<br>(株)エフ・エム通商 |
|---|---|--|---|

(順不同)

## 協賛企業に聞いてみた。 応援しています コープの森づくり

#5

### 株式会社 エフ・エム通商

エフ・エム通商は現在、貿易と食品の流通、ペットグッズの製造販売を主に行っています。食品ではコープさっぽろにも北海道にこだわった安全安心の食品を卸しています、トドックで販売するペット専用シーツの「環境シーツ」では、販売を通じてあすもりに寄付をして森づくりを応援しています。

「環境シーツ」は、以前はリサイクルペーパーを使用していたのですが、今はバージンパルプを使っています。森林は循環資源です。東南アジアでの森林資源活用と森づくりも行って、パルプを使うことによって維持される森があるということも消費者のみなさんに知っていただければと思っています。

北海道には豊かな自然資源があります。森も海も私たちもつながっている。そこには共に生きる共生の考え方が必要です。それは「守る」ではなく「育てる」自然だと思っています。そのために、若者がもっと第一次産業に参画できるように、北海道はその魅力を語り、都市部から地域への移住を積極的に進めるべきです。そうすれば、もっと北海道の森も人も元気になると思

います。✂



話してくれたひと  
(株)エフ・エム通商  
代表取締役  
藤原 正志さん

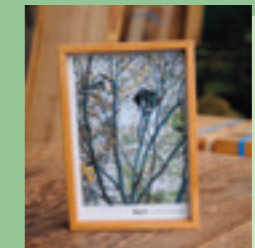
(株)エフ・エム通商 <http://www3.ocn.ne.jp/~fmtsusho/>

## Present アンケート&プレゼント

「モリイクvol.7」いかがでしたでしょうか。今後の紙面づくりのために、アンケートにご協力をお願いします。

- Q1 モリイクを読んだ感想をお聞かせ下さい。
- Q2 面白かった記事・つまらなかった記事はどれですか？ 右から3つお選び下さい。
- Q3 森づくりの活動に参加したことがありますか？(はい/いいえ)
- Q4 コープ未来の森づくり基金の活動へのご意見があればお聞かせください。
- Q5 取り上げてほしい記事のテーマがありましたらお書き下さい。

巻頭コラム(P2,3)  
グリーンウッドワークへの誘い(P4~7)  
木づかい(P8)  
大きな木の小さな物語(P9)  
森のコワイ!アブナイ?(P10,11)  
森林再生コラム(P12)



**PRESENT!**  
アンケートに回答いただいた方から抽選で1名様に、ビヨルンより、小窓をイメージしたミズナラのフォトフレーム(中西さん撮影のヒグマの写真入り)をプレゼントします。

### 応募方法

アンケートの回答をご記入の上、住所・氏名・年齢・連絡先を明記して、はがき、FAX、メールにてお送り下さい。プレゼントの当選は発送をもって替えさせていただきます。  
応募締切 5/31(土) 当日消印有効

**コープさっぽろ基金事務局**  
〒063-8501 札幌市西区発寒1条5丁目10番1号  
FAX: 011-671-5743  
メール: [csap.k.asumori@todock.jp](mailto:csap.k.asumori@todock.jp)



携帯メールは  
こちらからどうぞ